

41

## 傷寒雑病論以降、 補土派と補腎派の成立についての一考察

莊 明仁

台湾 瑞聯中医クリニック

『傷寒論』の主要な思想をどう受け止めるべきなのか、それが後世の医学専門家によって、ずっと議論されてきた。一方、『傷寒論』の文章は簡略にして奥深い、処方平易にして用心深い。そのため、研究者は『素問』や『難経』などの古典に依拠するしか、理解しようがなかった。その結果、成無己(せいむき)以来、古典によって古典を説明する、という方法で『傷寒論』を読解する傾向があり、「補土」と「補腎」、二つの流派を形成するに至った。

補腎派・許叔微(宋)の著作『普濟本事方』第二巻のなかに、虚弱な脾胃のせいで、全く食べられない患者を治療する方法が記されていた。「食物が一向に喉を通らない、脾の薬を仰いでも無駄な患者。この処方を投薬した結果、ようやく気持ちよく食べられるようになった。もっぱら虚弱な脾から来た病だと考えては、大間違いだ。なぜなら、腎気の衰弱は、真元(真の元気)の衰弱をも意味することなのである。言ってみれば、ひ弱い火力の窯に置かれた米のごとく、一日経っても、到底ご飯を炊けることがあり得ない。」(二神丸項目)更に、『難経』第三十六難曰く:「二つの腎は、皆腎ではない。その左が腎で、右が命門である。命門は精神の宿るところ、原気の繋るところである。」命門という火が衰えれば、おのずと消化機能の不調を来たすのである。

補土派の代表人物・李東垣の『脾胃論』、その脾胃衰弱論によると、「脾胃の虚弱化は、およそ陽気の生成を阻んでしまう。四季の義が行き届かなくなり、五臓の気も生成しなくなる。」また、有持桂里の『稿本方輿輶』第九巻の小品黄耆湯項目では、こう記してある。「(前略)普段からげんなりして、躁熱で眠れなくなる。下腹部痛く、小便は赤い。残尿、陰萎の問題あり、陰部の湿気や尿の白濁が原因で、各方面から健康を害してしまう。」『傷寒論』の小建中湯によって、腎の虚弱化や尿の赤/白濁、性機能不全を対処する好例である。

ところが、実は、『傷寒論』のなかに「命門」という言い方がないのだ。補腎派というのは、『難経』の「扁鵲學派」に『傷寒論』の内容や処方を取り入れ、更に発展したものと見なしては、無難であろう。一方、李東垣如きの補土派は、「内経」の黄帝学派に独創的な見を取り入れたものだと、理解すべきであろう。また、陳修園は「土によって水が生まれる」という見解を持ち出し、「人間が生まれてからには、後天的な滋養によって先天的な肉体を育てなければならない。それは、中焦を通して精を腎へと輸送することがなければ、腎への栄養補給が到底不可能だと言わなければならない。」そして「本格的な腎虚に対処するには、脾の保養に専念しなければならない。なぜなら、五穀の消化によって始めて、精が生成されたのである。」と主張する。結局彼は、脾(胃)という臓腑の優位性、および「脾を通して、精を腎へと運輸する」という経路を確立したのである。しかしながら、「五行理論」を後にして、もっぱら「方証相對」という方法に走った吉益東洞とは違い、陳はある程度まだ「五行理論」に依拠しつつ、議論を展開していたのである。『甲乙経』の中には、『傷寒論』は『湯液経』から生まれたものとされているが、筆者の思うところでは、『傷寒論』の主要な思想は、「營衛」という二文字にあると言わなければならない。「營気」は胃の中焦から出てくる、「衛気」は上焦から出てくる、だとすれば、胃気と三焦という思考は、『傷寒論』の主要な思想に一番程近い、と言っても妥当であろう。